

学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究

The Research of Clinical Psychological Approach on Schools

研究代表者：森田 健一 (D3)

指導教員：桑原 知子

研究分担者：井上 明美 (D3) 宮嶋 由布 (D2) 友尻 奈緒美 (D1)

中藤 信哉 (D1) 永山 智之 (M3) 菱田 一仁 (M3) 磯村 知徳 (M2)

岩城 晶子 (M2) 加藤 のぞみ (M2) 田中 崇恵 (M2)

〔研究目的〕

本コロキウムの研究者は、スクールカウンセラー、こころの教室相談員、心の居場所サポーターなど、“心理臨床家”として学校現場で活動している大学院生を中心に構成されており、コロキウムには教師や学習指導員など、現場で我々心理臨床家が連携させてもらっている職種の方々も参加している。

近年、我々のような心の専門家の学校現場への派遣は増加の途をたどっており（“スクールカウンセラー”に限定しても、全公立中学校1万校への配置が完備され、全公立小学校2万校への配置も進められている）、それは教育振興基本計画における「今後5年間、教育相談等を必要とするすべての小・中学生がスクールカウンセラーによる相談等を受けられるように促す」という平成20年7月の閣議決定で表明されているように、学校教育領域全体の必要性に裏付けられている。しかし、平成21年度の「学校・家庭・地域連携協力推進事業¹」の中で、“スクールカウンセラー”や“スクールソーシャルワーカー”など、多様な専門性に基づく様々な支援のあり方が示されたことに象徴されるように、学校現場で我々心理臨床家がいかに独自性を発揮し、援助できるのかという根本的な問いを検討しなおす時期に差し掛かっている。こうした状況において、「我々心理臨床家は学校現場で如何なる関わりが必要なのか」という問題意識を改めて持ち直し、“現場実践に寄与しうる研究”を主眼に置き、活動を続けてきた。

〔研究経過および研究成果〕

我々のコロキウムにおける研究成果とは、すなわち現場実践に役立つことである。先述したように、我々のコロキウムは“実践的研究”を常に念頭に置いて行われている

¹ <http://www.nier.go.jp/jissen/syakaikyokuikuka/090114/rennkei.pdf>

ため、研究経過そのものが研究成果となるような構造を目指している。ここでは、今年度の活動について、以下の3点より、それぞれ研究経過と成果をまとめて報告したい。

1. 現場体験検討会 月1回程度のペースでメンバーが集い、それぞれの立場での実践体験を報告し合い、そこでの学びを現場実践に“持ち帰ること”を目指した検討会を行っている。それは具体的な対応の仕方や在り方についての検討のみならず、学校現場で活動することや、他職種の専門家と連携することに対して感じる難しさや不安についても触れられる機会となっており、参加者それぞれの現場実践の基礎を作る貴重な体験となる、グループ・スーパービジョンの機能も持っているように思われる。そうした個々の具体的な体験については、本冊子後半に収められている『報告』に詳述する。

2. 学校訪問 昨年度、一昨年度に引き続き「特色ある取り組みを行っている学校現場」への訪問を行った。近年、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、いわば「外部」の専門家の関与の重要性が訴えられており、様々な研究がおこなわれている。我々もそのような観点から研究を行ってきた中で、「外部」と比較しての「内部」、すなわち、そもそもの「学校」そのものについて検討することの必要性が感じられてきた。このような問題意識に基づき、「大津島小・中学校」と「生野学園高等学校・中学校」への訪問を行った。具体的な内容は『報告』に詳述するが、スタッフの工夫や努力をはじめ、学校という場の持つ“力”についての多様性に触れることができ、我々が各々の学校現場で関わる時に持ちうる視点として、有用な知見を得られたように思われる。

3. 学会発表 これまでの学校訪問で得た知見をもとに研究発表を行い（日本心理臨床学会第28回大会）、学校における“心理臨床的機能”というテーマについて考察した。様々な学校現場を訪問した中で漠然と感じられてきた“意義”について、メンバー全員で検討・言語化し合うプロセスそのものが大きな学びであり、筆者自身、実践現場でも折に触れてそのディスカッションでの思考やそこから導き出された結論が想起され、実際の関わりの中で発揮されることがあった。学会発表内容は『報告』に詳述するが、簡潔に言うと、心理臨床家が学校という場の持つ“集団”の力を信じた関わりをすることの重要性や（心理臨床家は“個”の重要性ばかりを重んじる、という批判もある）、それぞれの“学校”の持つ力を最大限に生かせるような観点を持ち、そうした観点に基づいた関わりをすることの重要性について、訪問によって得た知見に基づきながら論じた。

※最後に 以上のように、我々は常に“現場”を視野に入れながら活動を行ってきており、それらはコロキウム参加者個々の現場実践に实际的に役立ちうるものであったように思う。そうした“成果”を我々コロキウム参加者のみの共有で終わるのではなく、今年度試みた学会発表のように、今後も他の実践家と共有しうるものとして発信することが求められている。それは、上述したような国家レベルでの検討が盛んに行われる時代だからこそであり、何より、児童／生徒、保護者、教師といった、現場で我々心理臨床家の援助を求めている方々に対して、それらに応えうる関わりを行うために必然的に伴う我々のそもそもの責務だからである。

（文責：森田 健一）